

逃亡と自由

—南北戦争における視覚的表象の一断面—

公立千歳科学技術大学 理工学部 小川正浩

1

1857年3月、連邦最高裁判所はある訴訟に対する判決を下した。1846年にひとりの黒人奴隷が自由を求めて自らの主人を相手に地方裁判所に訴訟を起こしたことから始まったこの裁判は、徐々に激化していく南北対立を背景にして（「1850年の妥協」、「カンザス・ネブラスカ法」、「カンザスの流血」）、奴隷対奴隷主という個人間の争いを超えて、全奴隷制支持者と全奴隷制反対者の闘いへと様相を変えていく。この判決によって、奴隷制度を巡る国論の分裂が一層深まり、その後に待ち受ける南北戦争の原因のひとつとなったと言われている。

ここで、いささか長くなるが、今一度このドレッド・スコット対サンフォード事件のあらましを見ていくことにしよう。

ドレッド・スコット(Dread Scott)は1795年ヴァージニア州でピーター・ブロウ(Peter Blow)の所有する奴隷として生まれるが、1832年にブロウが亡くなると、翌1833年に陸軍軍医であったジョン・エマーソン(John Emerson)に買われた。スコットはエマーソンに伴って、およそ6年に亘って奴隷制を禁止している二つの自由州に居住した。1843年にエマーソンが病死すると、奴隷を含めた彼の資産は妻のアイリーン(Eliza Irene Sanford)が相続した。1846年、スコットはアイリーンから自分たちの自由を買おうとしたが、彼女はそれを拒否したので、同年4月、スコットは彼女を相手取ってミズーリ州裁判所に自分と家族の自由を求める訴訟を起こした。スコットの訴訟の根拠は、奴隷制を禁止している自由州に一定期間住んでいたのであるから、それによって奴隷から解放されて自由を得る資格が保障されるべきであるということであった。

一審、二審ともスコットに勝訴の判決が下りる。しかし、エマーソン夫人は判決を不服として州の最高裁判所に上告した。ただし、この時点で彼女は再婚してマサチューセッツ州に転居したので、これ以降はスコット一家を譲り受けていた兄のジョン・サンフォード(John F.A. Sanford)が訴訟を遂行していくことになる。1852年11月、州最高裁は一審、二審の判決を破棄し、スコットとその家族は法的には奴隷であるという判決を下した。判決の主旨は、たとえスコットたちが自由州に居住していたことによって自由人になったとしても、奴隷州に戻ればまた奴隷の身分に戻るという考え方であった。もし自由を得たければ自由州に居住している間に訴えを起こす必要がある、というのである。

1853年、スコットはサンフォードを相手に連邦裁判所に訴えを提起するがここでもスコットは敗訴する。この判決に対してスコットは連邦最高裁判所に上告するが、1857年3月に最高裁は、スコットは奴隷の身分のままであるという控訴裁の判決を支持し、ここにスコット対サンフォード裁判の決着をみたのである⁽¹⁾。

最高裁が出した結論は一見するとこれまで下級裁が下してきた判決を踏襲しているように見えるが、実は合衆国領土内における奴隷制度の合憲性を問う、かなり踏み込んだ内容となっている。以下に三点から成る判決文の趣旨をまとめておきたい。

第一に、スコットは憲法上合衆国の「市民」ではない。つまり、アフリカ人を祖先に持つ黒人奴隷はその子孫においてまで所有者の動産であって、主権者である市民とは言えない。また、黒人は白人より劣っているため、白人と同等の権利を持つことは許されず、むしろ黒人は自らの利益のために奴隷に留まるのである。よって、仮に自由州が黒人を市民と見做したとしても憲法上黒人は州の市民とは認められず、連邦裁判所に提訴する権利を有しない。第二に、スコットはミズーリー州の市民ではない。たとえ彼が一時的に自由州に滞在していたとしても再び奴隷州であるミズーリー州に戻ってきた以上、彼はその州の法律に服さなければならない。だとすれば、スコットは奴隷以外の何物でもない。したがって、連邦裁判所は異なる州の市民間の訴訟としてこの事件を扱う権限を欠いている。第三に、そもそもスコットがこの訴訟を提起した理由は、自分が自由人であるという主張であり、その根拠は1820年のミズーリー妥協に依るものである。しかし、連邦議会は準州における奴隷制度を禁止する権限を有しておらず、さらには正当な法の手続きを経ずに市民の財産を剥奪する権限は持たない(当然奴隷も市民の財産である)。よってミズーリー協定は違憲であり、無効となる⁽²⁾。

これ以降国内では奴隷制支持者と反対者の溝はさらに深くなり、数年後には領土内は地獄の業火に見舞われることになるのだが、いまここで注目すべきことは、奴隷の身分如何を問うのは、これまで慣例的に容認されていた空間的な条件ではなく、人種的かつ家系的な問題であり、それはその子孫にまで及ぶということである。つまり、ミズーリー協定がある程度効力を発揮していた時には、黒人奴隷は奴隷州から自由州へと地理的移動をすることで、奴隷の身分から自由人へと社会的移動をなし得ることが可能であった⁽³⁾。しかし、最高裁の判決はそれを真っ向から否定したのであった。

では、奴隷制問題が南部と北部の間で先鋭化していった状況の中で画家たちはどういう反応を示していただろうか。画家たちは一人の黒人奴隷が起こした無謀な裁判に関心を寄せたのだろうか。残念ながら、私の知る限り、ドレッド・スコット事件を図像化したものは無いように思われる⁽⁴⁾。もちろんこれから私が取り上げることになるイーストマン・ジョンソン(Eastman Johnson)の《自由への疾駆—逃亡奴隷 A Ride for Liberty—The Fugitive Slaves》(c. 1862)も直接それとは関係があるとは言えないかもしれない⁽⁵⁾。だが、逃亡奴隷を主題としたこの絵画には、スコット事件で問われた人種と移動と自由の問題に対する彼の関心が示されているようにも見える。ただし、この作品ではスコットのように奴隷州から自由州へと地理的移動を果たすことで自由を得ることが主題ではない。なるほど《自由への疾駆—逃亡奴隷》に登場する人物たちも同じく自由を得るために場所を移動していくが、後述するように、その目的地は内戦時における北軍の前線である。事実、南北戦争勃発直後に北軍のある基地に保護を求めてきた3人の逃亡奴隷を所有者に返還することを拒否したことを契機に、多くの奴隷たちが自由を求めて「星条旗」がたなびく連邦軍の前線を目指した。もっとも、この時点では逃亡奴隷に対する連邦政府の統一見解がとられていなかったため、戦地の指揮

官によって彼らに対する対応が分かれてはいたが（フランクリン、214-15；クォールズ、146-47）。

本稿では、南北戦争時初期に多く見られた逃亡奴隷の視覚的表象の一例としてジョンソンの《自由への疾駆》を取り上げて、その歴史的な文脈を参照しながらこの絵画に込められた作者の意図を考えてみたい。

2

逃亡奴隷に対する扱いが厳しくなったのは、1850年の「逃亡奴隷法」からである。この法律によって、南部北部は問わず、すべての合衆国市民は黒人奴隷の非合法の移動を告発する義務と逃亡奴隷を見つけた場合は直ぐに報告する義務を負うことになった。北部の奴隷制廃止論者たちは怒りを隠さなかった。彼らは自由に移動できる権利は人種に関係なくすべてのアメリカ人に与えられた憲法上の権利であると述べた。しかし、こうした意見を持つ人々は少数派だった。

移動の自由がなくなれば、当然、黒人奴隷たちは非合法の移動、すなわち逃亡を図ることになる（「地下鉄道」は逃亡奴隷たちを援助した最も有名な組織だが、50年代以降は多くの危険や困難に直面した）。南部ではある医者がこうした逃亡奴隷たちの精神状態を医学的な観点から研究し、彼らが逃げたいという願望を持つのは一種の精神病が原因であるという説を発表した。この病気を「発見」したのがニューオーリンズの著名な医師で奴隷制支持者のサミュエル・カートライト(Samuel Cartwright)であった。彼はその病名を「ドラペトマニア」(Drapetmania)と名づけた。この言葉はギリシア語で逃亡奴隷を意味する「ドラペテース」(δραπετης)と狂気を意味する「マニア」(μανια)を組み合わせた造語である(Cartwright, 331)。カートライトは奴隷が「理由もなくむすつとした表情になり、自分の置かれた状況に不満を示すようになれば」(Cartwright, 332)、それはまさにドラペトマニアの初期症状であり、逃亡を図りたいと考えているかもしれない、と言う。そういう時は「鞭打ちによって奴隷たちの中から悪魔を追い出」(Cartwright, 332)し、彼らが再び主人に従順になるまでそれを続けることを推奨する。そして彼は「奴隷の逃亡を防ぎ治療するためには、ただそのままの状態にしておき、子供のように優しく扱わねばならないだけである」(Cartwright, 333)と提案する⁽⁶⁾。

こうした荒唐無稽な説が奴隷制を容認している南部人に広く受け入れられたであろうことは想像に難くない。奴隷を鞭打つことに科学的なお墨付きを与えたのだから。しかしそれでも逃亡を図る奴隷は後を絶たなかった。奴隷所有者たちは逃げた奴隷を取り戻すために獰猛な猟犬を連れて仲間たちと共に「奴隷狩り」を行った。この時重要な役目を担ったのが、所有者たちが貼り出す手配書だった。そこには逃亡者を特定する情報と逃亡者を描いた図像と共に捕獲者に渡される報奨金の金額が記されていた。このような手配書を多く流布させることで奴隷制支持者たちが黒人奴隷の自由な移動を取り締まることに血眼になっていたことが推察されるだろう(Wood, 87-89)。ただ興味深いのは、手配書のテキストには逃亡者

を追跡して捕獲に役立つような具体的な情報（名前、身長、年齢、容姿はもちろんのこと仕事上の能力や身体上の傷痕まで）が記されている一方で、図像の方はそうした情報を文字通り再現しているものではなくステレオタイプ化された逃亡奴隷の図像だということである。ここにはある種の矛盾が露呈されているように思われる。つまり、逃亡奴隷を特定するための詳細情報の記述は、結果的には奴隷をひとりの人間として扱っているようにも見えるが、それは人間性の否定を前提とする動産としての奴隷という考え方と齟齬をきたすことになりはしないだろうか。文字情報は逃亡者を個人として前景化するが、視覚情報はどの逃亡者も一様に同じスタイルをとるということを伝えている。要するに、黒人奴隷を個人として扱いながらもそれを無効化するような巧妙な詐術が働いているのである。

では、奴隷廃止論者たちはどういう図像表現を用いて逃亡奴隷たちが経験する過酷さを伝えただろうか。

『ハーパーズ・ウィークリー』の1862年2月15日号に奴隷制の野蛮さを非難するようなあるイラストが掲載された。この図像には「奴隷所有者たちの間で使われる拷問器具」というタイトルの短い文章が添えられていた。この文章はアイオワ義勇軍の第4連隊所属のチャールズ・O・デューイ軍曹(Charles O. Dewey)からの報告文という形をとっていて、おおよそ以下のような内容となっている。

つい最近我々北軍の前線に奇妙な器具をつけた黒人奴隷が逃げ込んできた。この器具は首回りにしっかりと固定されていて、取り外すのに1時間ほどかかった。こんなものをつけられたら逃亡しても無駄なように思えるが、黒人奴隷の話によると、彼はこの器具をつけた状態で2か月間密林の中を逃げ回っていたそうだ。もっとも、その器具の重さと形状のために横になることもできず、体にはかなりの負担となっていたようだ。この器具は鉄製の首輪の形をしていて、そこに細長い棒状のものが3本ついていて、その先端にはそれぞれ鉄のリングがついている。今や彼は奴隷の身分から解放され、その器具は我々が保管している。言うまでもなく、我々は逃亡奴隷を所有者のもとへは送り返したりしない(Harper's Weekly, 108)。

黒人奴隷は追跡者が迫っているのか、一瞬凍りついたように立ち止まり、振り向きざまに見せる恐怖の表情と異様な首輪が視覚的に強調されている。おそらくこのイラストを見た読者は黒人奴隷に憐憫の情を抱いたことだろう。ここには無力な、悪しき奴隷制の犠牲者としての黒人奴隷が、幾分戯画化された形で表象されている。

さらにこのイラストとほぼ同じ時期に逃亡奴隷を主題にした二枚の絵画が描かれている。一枚目は、リチャード・アンズデル(Richard Ansdell)の《追い詰められた逃亡奴隷 Hunted Slaves》(1861)で、沼地に逃げ込んだ奴隷夫婦と彼らを追ってきた猟犬との死闘をダイナミックに描いた作品である。もう一枚は、トマス・モラン(Thomas Moran)の《沼地での奴隷狩り Slave Hunt, Dismal Swamp, Virginia》(1862)で、密林の中にある沼地を通して逃げようとする奴隷家族と彼らを追うハンターと猟犬を崇高な自然を背景に描いた作品である。それぞれの表現形式は異なっているが、それでも両作品の主題の根底にあるのは、おそらく彼らの逃亡は失敗する運命にあるだろうということである。少なくとも各画面上には彼らの逃

亡の成功を暗示するような記号は無いように見える。とは言え、彼らの逃亡が必ず失敗するだろうと、断言もできないが。しかし観者はアンズデルの作品に逃亡者のヒロイックな死を、モランの作品に自然の壮大さの中で為す術のない卑小な逃亡者の運命を連想したのではないだろうか。いずれにしても、『ハーパーズ・ウィークリー』のイラストにしろ、アンズデルやモランの絵画にしろ、逃亡者をある一定の型にはめることで（無力な犠牲者、あるいは逃亡が失敗に終わる）、世間に奴隷制度の弊害を多少なりとも知らしめることはできただろう。だが、果たして逃亡奴隷たちに自由獲得の希望はないのだろうか。

3

《自由への疾駆—逃亡奴隷》は南北戦争初期に描かれた作品である。この時期にアフリカ系アメリカ人を主題として選んだり、戦争の実情を直接描いたりする画家はほとんどいなかった⁽⁷⁾。ジョンソンはそうした数少ない画家のひとりであった。興味深いことに、ジョンソンがこの作品を公的な施設で展示したという記録は残っていない(Harvey, 202)。戦時中の不安定な政治的・社会的情勢を考えれば、逃亡奴隷を真正面から描くことで巻き起こる騒動を彼が懸念したのかもしれない⁽⁸⁾。

この絵画には四人の家族—父と母と息子と乳児—が、朝焼け雲の下、馬上に乗って平野を疾走する情景が描かれている。画題を文字通りに受け取ればこの家族は逃亡奴隷ということになるが、上述したように、逃亡奴隷を描いた図像表現によく見られる、彼らを追う猟犬やハンターたちが画面上に不在である。構図は画面中央に大きく描かれている馬の背に登場人物たちを三角構図で配置し、それがほぼ画面全体を占めている。ここで目を引くのは、三角構図の中に配された父親と母親の横顔がそれぞれ別方向に向いているということである。しかも赤子を抱く母親の左手と接する父親の背中の辺りを分岐点として画面が左右にほぼ等しく分割されている。ハーヴェイによると、彼らの視線の向きの違いは、父親は未来を、母親は過去を見ていることを表しているという。彼は家族のために危険を冒して自由を手にするため馬を走らせている。一方、彼女は振り返って追跡者が近くに来ていないかを確認すると同時にこの大胆な（あるいは無謀な）移動によって故郷に置いてきたすべてのものを回顧しているようにも見える(Harvey, 200)。

実はジョンソンはこの絵画の別ヴァージョンをあと2枚描いている⁽⁹⁾。今ここで俎上に載せている作品は、ブルックリン美術館に所蔵されているヴァージョンである。それには、画面左遠景に北軍兵士たちが担ぐ銃剣に反射する光のきらめきが描き加えられている。この細部はヴァージニア美術館所蔵のヴァージョン《自由への疾駆—逃亡奴隷、1862年3月2日 A Ride for Liberty—The Fugitive Slaves, March 2, 1862》(1862)には描かれていない。それを除けば、2枚の絵画はサイズも構図もほとんど変わらない。ここで気になるのはこの2枚の作品の描かれた時期だが、あいにくジョンソン研究家たちはそれを明確にはしていないようだ。ただ、ヴァージニア美術館のヴァージョンの裏面にジョンソンが書き留めた一文が残されていて、それがひとつの手掛かりを与えてくれる。「1862年3月2日。マクレラン

少将の部隊がマナサスに向けて出発する朝にセンターヴィルで私自身が目にした内戦での実際の出来事。イーストマン・ジョンソン」⁽¹⁰⁾。このメモからはジョンソンが自ら目撃した出来事を絵にしたことが窺える。ということは、この絵の中の逃亡奴隷たちは無事に北軍の前線まで辿り着いて、自由を得ることができたと想像することも可能だろう。しかし、ジョンソンが記した日付が正しいものだとしたら、彼らの未来が明るいものかは怪しくなってくる。なぜなら、この時点ではまだ逃亡奴隷法は有効であったため、たとえ彼らが北軍に逃げ込んだとしても彼らを自由の身分にするか、あるいは所有者に返還するかは個々の将校の判断に委ねられていたからである。リンカン大統領は、軍における逃亡奴隷を巡る対応に混乱が生じたため、1862年3月13日に連邦議会が可決した前線における逃亡奴隷返却禁止法案に3月31日に署名し、この法律に違反した将校には罰則が適用されることになった（中村、549）。この事実は《自由への疾駆—逃亡奴隷》にひとつの不安要素をもたらす。仮にその登場人物たちが北軍の前線に辿り着けたとしても、必ずしも彼らの自由が保障されるとは言い切れない。というのは、マクレランは逃亡奴隷を所有者に返還した多くの将校のひとりであったから(Harvey, 199-200)。

それでもおそらくジョンソンは物語をある程度明確にするためにヴァージニア美術館のヴァージョンにはない細部をブルックリン美術館のヴァージョンに加えたのではないだろうか。何処ともなく馬を走らせているように見える前者よりも北軍の前線を可視化することによって家族一行が目的地に辿り着ける可能性を示唆する後者の方が観者にいくらかの希望を与えられるように。

4

北軍の勝利は黒人奴隷たちを解放へと導いた。今や彼らは国内を自由に移動することができるようになった。しかし確かに奴隷時代と比較すれば移動の自由は保障されたが、彼らを取り巻く社会的な状況は何一つ変わることはなかった。なるほど、再建期には憲法修正第13条、14条、15条の成立によって、一時的には彼らの待遇は改善されたかのように見えた。だが、再建が失敗し、黒人問題への関心が徐々に薄れていく中、北部も南部も産業拡大へと大きく舵を切り、地域の経済的発展のために多大なるエネルギーを注ぐことになった。時代は変わった。風俗画家が人種的マイノリティたちを主題として取り上げて教訓的・道徳的目的に奉仕することはもはや主流ではなくなり、ジョンソンも1870年代以降は都会のエリートたちをモデルに肖像画家として活躍していくことになる。

註

- (1) ドレッド・スコットがなぜ奴隷制度を容認していたミズーリ州で訴訟を起こしたかはよく分かっていない。すでに我々はこの11年にも及ぶ裁判経過を知っているので、当然もっと早い時期に、つまりは北西部条例によって奴隷制度を認めない自由州である

イリノイ州に居住していた時に、あるいはミズーリ妥協によって自由地域となっていたウィスコンシン準州に留まっていた時に彼は自由を得る資格を得ていたことで訴訟を起こせばいいのにそれをしなかったことに疑問を抱くだろう。さらに付言すれば、スコットはウィスコンシン準州にいる間にハリエット・ロビンソン (Harriet Robinson) という奴隷女性とエマーソンの同意の下で法律上正式に結婚したことにより、自由人としての身分を保証されたことになる。なぜなら、当時の南部諸州の法律では奴隷に法律上の婚姻を行う権利はなかったからである。いずれにしても、スコットが長期に亘る裁判を行い得たのは、自由黒人たちの協力ばかりでなく奴隷制度に反対する多くの白人支援者たちの助けがあったからである。ちなみに、スコットは敗訴後最初の所有者であったブローの息子に買われた後で家族共々奴隷から解放された。スコット事件の概要に関しては、参考文献に挙げた「黒人史」、「アメリカ史」の書物を参照したが、とりわけ本田 (1991)、阿川 (2004) の記述が最も詳しく参考になった。

- (2) 連邦最高裁の判決文の概要については、註(1)でも触れた文献に依った。特に、阿川 (2004)は合衆国憲法に照らしてスコット事件を詳述していて益するところが大きかった。
- (3) 阿川によると、スコットが最初に訴訟を起こしたミズーリ州の裁判所はこれまでも「礼譲の原則にしたがって、北部法の効力を認め」、自由州で一定期間居住した奴隷に奴隷州に戻った後も自由を保障してきた。ただスコットにとって残念なことは、裁判が長期に及んだおかげで、南北対立が鮮明になっていく中でもはや南部の裁判所は北部の法律を適用しなくなっていたということであった。1851年のストレイダー対グラハム事件の連邦最高裁判決もそのことを追認している (阿川、226-227)。
- (4) 1850年代に描かれた奴隷制問題と関連する、比較的多い主題は「奴隷市場」である。またこの時代に起きた二つの歴史上の事件、すなわち「マーガレット・ガーナーの事件(1856)」と「ジョン・ブラウンの事件(1859)」をトマス・ノウブル(Thomas Noble)がそれぞれ1867年に作品化している。
- (5) ジョンソンがアフリカ系アメリカ人を主題として描いていた時期は、大体1850年代後半から1860年代である。1859年4月に開催されたナショナル・アカデミー・オブ・デザインで公開された《南部の黒人生活 Negro Life at the South》という絵画はジョンソンに最初の成功をもたらした。この作品は、忽ちのうちに大衆や批評家から多大なる注目を集めることになり、彼がアカデミーの正会員に選ばれる契機ともなった。すぐさま複製がなされ、広く国内に知られることとなり、この作品の人気を不動のものにした。《南部の黒人生活》は、奴隷制廃止論者たちからは、朽ち果てた家屋の裏庭に集う黒人奴隷たちの荒れ果てた生活状態がまさに奴隷制度による道徳的退化を映し出しているように見える作品として称賛され、一方奴隷制支持者たちからは、奴隷たちが銘々余暇活動を楽しんでいる様子は強制労働が身体的苦役でもなく、ましてや家族を引き裂くものでもないということの視覚的証拠として受け入れられた (再建期にそのタイトルがスティーブン・フォスター[Stephen Foster]の1853年の「ケンタッキーの我が家」

[My Old Kentucky Home]にちなんで《懐かしのケンタッキーの家 Old Kentucky Home》と呼ばれたように、それは在りし日の南部を懐かしむノスタルジックな絵画となった)。こうした解釈の曖昧性と本来《南部の黒人生活》がワシントン D.C.という都会における奴隷制度の文脈の中で描かれたこととの関連性はディヴィス(1988)の論文に詳述されている。

- (6) 1840年代から50年代は、科学的なデータに基づいて人種の差異を強化し、その序列化を図る動きが活発であった。たとえば、頭蓋骨学者サミュエル・モートン (Samuel Morton) は、人種の起源はひとつではないという「多祖起源説」(polygenesis)を主張して、蒐集した膨大な頭蓋骨の容量を測定して実証的に人種の序列化を構築した。しかし、聖書の内容と矛盾する多祖起源説は南部ではほとんど受け入れられなかった。牧師を始めとして多くの南部人は「単祖起源説」(monogenesis)を支持していたからだ。聖書には奴隷制擁護者たちを喜ばせるような記述に事欠かなかったのである。南部人であるカートライトも単祖起源説支持者で、黒人奴隷に関する問題を医学的見地から探求していた。彼はドラペトマニアの他にもうひとつ黒人奴隷特有の精神病を見つけ、それに「エチオピア感覚障害」(Dysethesia Aethiopica)という名前をつけた。グールドによると、それは呼吸機能が不十分な病気で、症状として「仕事をしているとき、自分に課せられた仕事を軽率で不注意な態度で行う。栽培している植物を足で踏みつぶし、くわで切断し、使っている道具をこわし、手あたり次第何でもだめにする」(グールド、78)傾向が見られる。こうした行動に対してカートライトは次の治療法を提案する。「血液の脱炭酸作用【二酸化炭素の除去】を支えるために肝臓、皮膚、腎臓を刺激して活発する必要がある。皮膚を刺激する一番よい方法は、まず温かいお湯と石鹸で患者をよく洗うことである。それから油を全身に塗布し、幅広い革帯ですりこむ。さらに外気と日光の下で患者に少しきつい仕事をさせる。木を切ったり、横木を割ったり、横引きのこや細のこぎりで切るなどの作業によって肺をひろげさせる」(グールド、78)。現代の我々から見れば、モートンの説もカートライトのそれも疑似科学的言説に過ぎないと笑って済ませられるが、しかし科学が政治や社会の影響を受けて客観性を装いながらある特定の権力者たちに都合よく利用されるのも歴史が教える通りである。
- (7) 南北戦争を題材(アフリカ系アメリカ人表象も含めて)に取り上げた画家はそう多くはない。戦争の現実や戦場の惨たらしさを世間に伝えたのは、マシュー・ブレイディ(Matthew Brady)のような写真家や『ハーパーズ・ウィークリー』のような挿絵入り週刊雑誌に戦場スケッチを提供したイラストレーターたちであった。
- (8) 政治的意見の分かれる事象を題材に選んで発信することには常にリスクが伴う。たとえば、彫刻家ジョン・ロジャーズ(John Rogers)は1859年に《奴隷売買 The Slave Auction》という小さな石膏模型像を造った。この物語彫像は奴隷制廃止論者たちには好評を持って受け入れられたが、売り上げは散々だった。1863年に彼はこう回想している。「この作品は他の作品と比べてもかなり満足のいく出来だったが、売り上げは他の作品の半分にも満たなかった。国論を二分するような題材を取り上げたことで私は客の半分以上を失っ

てしまった」(Wallace, 183)。この回想から3年後にロジャーズは売り上げの減少を受けてこの彫像の製造販売を中止することになる。

(9) ヒルズは三枚目のヴァージョンがあることに言及しているが、その詳細については記述していない(Hills[1999], 136)。

(10) ハーヴェイはジョンソンが記している日付の正確さに疑問を呈している。彼によると、マクレランがワシントンを出たのが3月7日、センターヴィルに到着したのは3月9日であった(Harvey, 200, 267-68n79)。

引用・参考文献

- Baur, John I. H. *An American Genre Painter: Eastman Johnson, 1824-1906*. Brooklyn: Brooklyn Museum, 1940.
- Boime, Albert. *The Art of Exclusion: Representing Blacks in the Nineteenth Century*. Washington, D. C.: Smithsonian Institution Press, 1990.
- Burns, Sarah. *Pastoral Inventions: Rural Life in Nineteenth-Century Art and Culture*. Philadelphia: Temple University Press, 1989.
- Captive Passage: The Transatlantic Slave Trade and the Making of the Americas*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press in association with The Mariners' museum, 2002.
- Cartwright, Samuel. "Diseases and Peculiarities of the Negro Race." *Debow's Review* 11, no. 3 (September 1851): 331-33.
- Davis, John. "Eastman Johnson's *Negro Life at the South* and Urban Slavery in Washington, D.C." *The Art bulletin* 80, no. 1(March 1998): 67-92.
- Harvey, Eleanor Jones. *The Civil War and American Art*. Washington, D.C.: Smithsonian American Art Museum, 2012.
- Hills, Patricia. "Cultural Racism: Resistance and Accommodation in the Civil War Art of Eastman Johnson and Thomas Nast." In *Seeing High and Low: Representing Social Conflict in American Visual Culture*, edited by Patricia Johnston, 103-23. Berkeley: University of California Press, 2006.
- . "Painting Race: Eastman Johnson's Pictures of slaves, Ex-Slaves, and Freedmen." In *Eastman Johnson: Painting America*, edited Teresa A. Carbone and Patricia Hills, 121-66. New York: Brooklyn Museum in association with Rizzoli International Publications, 1999.
- Honour, Hugh. *The Image of the Black in Western Art. Volume IV: From the American Revolution to World War I. Part I: Slaves and Liberators*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1989.
- "An Instrument of Torture Among Slaveholders." *Harper's Weekly* 6, no. 268 (February 15, 1862): 108. 【復刻版、本の友社】
- Johns, Elizabeth. *American Genre Painting: The Politics of Everyday Life*. New Haven, CT: Yale University Press, 1991.

McElroy, Guy. *Facing History: The Black Image in American Art, 1710-1940*. San Francisco: Bedford Arts, Publishers, in association with The Corcoran Gallery of Art, 1990.

Wallace, David H. *John Rogers: The People's Sculptor*. Middletown, CT: Wesleyan University Press, 1967.

Wood, Marcus. *Blind Memory: Visual Representations of Slavery in England and America, 1780-1865*. New York: Routledge, 2000.

有賀貞也・大下尚一・志邨晃佑・平野孝編『アメリカ史1』（山川出版社、1994）。

阿川尚之『憲法で読むアメリカ史（上）』PHP新書（PHP研究所、2004）。

上杉忍『アメリカ黒人の歴史：奴隷貿易からオバマ大統領まで』中公新書（中央公論新社、2013）。

クォールズ、ベンジャミン『アメリカ黒人の歴史』明石紀雄・岩本裕子・落合明子訳（明石書店、1994）。

グールド、スティヴン・J『人間の測りまちがい：差別の科学史』鈴木善治・森脇靖子訳（河出書房新社、1989）。

小山起功『黒人史講義』（彩流社、2005）。

中村甚五郎『アメリカ史「読む」年表事典2：19世紀』（原書房、2011）

ノートン、メアリー・ベス他『アメリカの歴史3：南北戦争から20世紀へ』本田創造監修、上杉忍・高橋裕子・中條献・戸田徹子・宮井勢都子訳（三省堂、1996）。

バーダーマン、ジェームス・M『アメリカ黒人の歴史』森本豊富訳（NHK出版、2011）。

フランクリン、ジョン・ホープ『アメリカ国人の歴史：奴隷から自由へ』井出義光・木内信敬・猿谷要・中川文雄訳（研究社出版、1978）。

本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波新書（岩波書店、1991）。

ミラー、ディヴィッド・C『ダーク・エデン：19世紀アメリカ文化の中の沼地』黒沢真理子訳（彩流社、2009）。

モリソン、サムエル『アメリカの歴史3：ヴァン・ビューレンの時代—南北戦争1837-1865』集英社文庫、西川正身翻訳監修（集英社、1997）。